広報かがみの 2
2022年2月号 第204号 毎月1日発行

シリーズ 第141回

火の釜（かま）と火の雨伝説

町内には「火の釜（窯）」とよばれる古墳がいくつか存在します。具体的には石引山（いしひきやま）古墳（長藤）、法明寺火の釜（香々美）、井上火の釜（真加部）、土居天王山古墳（土居）、追坂（おさかだわ）山一号墳（富西谷）ですが、町外にも火の釜とよばれる古墳が多数あります。岡山県古代吉備文化財センターの岡本泰典氏の調査では、県内では約一五〇ヶ所確認されており、そのうち七割以上が美作に分布し、残りは備中地域や備前地域の北部に限定されていることから、古墳を火の釜とよぶ風習は美作地域を中心に広がっているようです。

石引山古墳（長藤）

法明寺火の釜（香々美）

追坂山一号墳（富西谷）

県北でなぜ古墳を「火の釜」とよぶのか、このことに言及した資料はなく、明確な理由はわかりません。各地の火の釜に共通するのは、いずれも横穴式石室の古墳であることから、この石室の形状が煮炊きをする「かまど」に似ていることが火の釜の由来ではないかということが最もしっくりきそうですが、石引山古墳には「昔、火が降った時にここに隠れた」とか「江戸時代の天明の飢饉の時に火の雨が降り、村人がここに隠れた」という伝説が伝わっています。

実は、この火の雨にまつわる伝説は全国的にも残されており、県内の火の釜にもこうした伝説をもつものがいくつかあります。また、同様の伝説をもつ「火の雨塚」「火雨塚」という古墳も各地に存在します。町内でも公保田に火雨塚古墳（荒神北塚）という古墳がありました。現在は消滅していますが、『作陽誌』の記述によればこれも横穴式石室の古墳だったようです。ではこの「火の雨」は何を物語るのでしょうか。

火の雨伝説を調査した福田祐美子氏は、こうした伝説は福島県から四国まで幅広く分布しており、最も多く残るのは中部地方であることを指摘しています。中部地方は江戸時代には富士山や浅間山など火山の噴火による被害が多くあった場所なので、火の雨は火山の噴火をさし、中部地方をこの伝説の発祥とし、そこから各地に広がっていく中で、その土地特有の内容と融合して変化していったのではないかと推定しています。

美作地域では、近隣に蒜山や大山などかつての火山はあるものの、これらが噴火したのは古墳が築造されるよりもはるか昔のことですので、美作地方で噴火を避けるために石室が使われたことはないでしょう。また、前述の石引山古墳の伝説にある「天明の飢饉の時に…」は、まさに天明三年（一七八三）の浅間山の大噴火をさすと思われ、県内では「火の雨塚」よりも「火の釜」と呼ばれる古墳の数の方が圧倒的に多いことを考えれば、元々横穴式石室の古墳を火の釜とよんでいた美作地域に、江戸時代後半以降に火の雨伝説が伝わり、火の釜の呼称と融合してこの地の伝説と化していったのではないでしょうか。もしそうであれば横穴式石室を「火」に関連させる美作地域では、火の雨伝説は比較的受け容れられやすかったことでしょう。

それではなぜ横穴石室を「火の釜」とよぶのか、そしてなぜこの呼称が美作地域を中心に広がっているのかという最初の疑問については、火の雨伝説から導き出すことはできませんでしたが、少なくとも火の釜の呼称と火の雨伝説がセットで広がったわけではないことは間違いないと思われます。

参考：『鏡野町の文化財』『作陽誌』『奥津町の民話』
「火の雨塚伝説についての一考察」
協力：岡本泰典

鏡野町教育委員会　生涯学習課　日下
電話(0868)54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】https://www.town.kagamino.lg.jp/